

芥川龍之助
文學者。東京
帝國大學文科
大學出身。

三 漱石山房の秋

芥川龍之介

夜寒の細い往來を爪先上りに上つて行く。古ぼけた板屋根の門の前へ出る。門には電燈がこもつてゐるが、柱に掲げた標札の如きは殆ど有無さへも判然しない。門をくゞると砂利が敷いてあつた。その又砂利の上には庭樹の落葉が紛々として亂れてゐる。砂利と落葉とを踏んで立關へ來ると、これも亦古ぼけた格子戸の外は、壁といはず壁板といはず、悉く蔦に蔽はれてゐる。だから案内を乞はうと思つたら、まづその蔦の枯葉をがさつかせて、呼鈴の鈕を探

さねばならぬ。やつと呼鈴を押すと、明りのさしてゐる障子が開いて束髪にゆつた女中が一人すぐに格子戸の掛金を外してくれる。狭い三疊の立關には泰山の金剛經の石刷を貼つた二枚折の屏風が立つてゐる。此處に帽子や外套がなかつたら、まづ先客はゐないものと思つて差支ない。

立關から右手の廊下へ出る。唐めいた欄干の續いた外には、もう秋風に裂けた芭蕉の葉が、婆娑と星月夜の空を拂つてゐる。晝見ると、その芭蕉の下には、霜にめげない木賊の色が一面に庭を埋めてゐるが、客間の硝子戸を洩れる電燈の光も、今はそこまでは照らしてゐない。いや、その光がさしてゐるだけに、向の軒先に吊した風鐸の影も、却つて濃くなつた宵闇の中に隠されてゐる位である。

硝子から客間を覗いて見ると、雨漏りの痕と鼠の食つた穴とが、白い紙貼の天井に斑々とまだ残つてゐる。が、十疊の座敷には、赤い

津田青楓
西洋畫家。漱石と親交ありし人。

藏澤

伊豫松山の畫家。

黃輿

中華民國の政治家。

木庵

歸化僧。黃蘗宗の高僧。

吳昌碩

支那現代の畫家。

安井曾太郎

西洋畫家。

五羽鶴の氈が敷いてあるから、疊の古びだけは分明でない。この客間の西側(玄關寄り)には、更紗の唐紙が二枚あつて、その一枚の上に古色を帯びた壁懸が一つ下つてゐる。麻の地に黄色い百合のやうな花を繡つたのは、津田青楓氏か誰かの圖案らしい。この唐紙の左右の壁際には、餘り上等でない硝子戸の本箱があつて、その幾段かの棚には、透間もなく、ぎつしりと洋書が詰つてゐる。それから廊下に接した南側には、殺風景な鐵格子の西洋窓の前に、大きな紫檀の机を据ゑて、その上に硯や筆立が法帖などと一緒に、存外行儀よく並べてある。その窓を餘した南側の壁と向の北側の壁とは、殆ど軸の掛つてゐなかつたことがない。藏澤の墨竹が、黃輿の「文章千古事」と挨拶をしてゐることもあり、木庵の「芳開萬國春」が、吳昌碩の木蓮と鉢合せをしてゐることもあるが、客間を飾つてゐる書畫は、獨これらの軸ばかりではない。西側の壁には、安井曾太郎氏の油繪の

齋藤與里
西洋畫家。

明月禪師

伊豫松山の僧。



風景畫が、東側の壁には、齋藤與里氏の油繪の草花が、さうして又北側の壁には、明月禪師の無絃琴といふ草書の横物が、いづれも額になつて掛つてゐる。その額の下や軸の前に、或は銅瓶に梅も、ごきか、或は青磁に菊の花が、その時、時で投込んでゐるのは、無論、奥さんの風流に相違あるまい。もし先客がなかつたなら、この客間を覗いた眼を更に

次の間へ轉じなければならぬ。次の間といつても、客間の東側には、唐紙も何もないのだから、實は一つ座敷も同じことである。唯此處は板敷で、中央に擴げた方一間あまりの古絨毯の外には一枚の疊も敷いてはない。さうして東と北と二方の壁には新古和漢洋の書物を詰めた、無暗に大きな書棚が並んでゐる。書物はそれでも詰り切らないのか、ちかに下の床の上へ積んである數も少くない。その上やはり南側の窓際に置いた机の上にも、軸だの、法帖だの、畫集だのが、雜然と堆く盛りあがつてゐる。だから、中央に敷いた古絨毯も四方に並べてある書物のおかげで、派手である筈の赤い色が僅ばかりしか見えてゐない。而も、その眞中には小さな紫檀の机があつて、その机の向には座蒲團が二枚重ねてある。銅印が一つ、石印が二つ三つ、ペン皿に代へた竹の茶筴、その中の萬年筆、それから玉の文鎮を置いた一綴りの原稿用紙——机の上にはこの外に老眼鏡が載

せてあることも珍しくはない。その眞上には電燈が煌々と光を放つてゐる。傍には瀬戸火鉢の鐵瓶が蟲の啼くやうに沸つてゐる。もし夜寒が甚だしければ少し離れた瓦斯暖爐にも赤々と火が動いてゐる。さうしてその机の後二枚重ねた座蒲團の上には、殆ど獅子を想はせるやうな背の低い半白の老人が、或は手紙の筆を走らせたり或は唐本の詩集を翻したりしながら、端然と獨坐つてゐる。

漱石山房の秋の夜は、かういふ蕭條たるものであつた。(點心)

四 文 鳥

夏 目 漱 石

十月早稲田に移る。伽藍の様な書齋に只一人片附けた顔を頬杖で支へて居ると、三重吉が來て、鳥を御飼ひなさい。と云ふ。飼つてもいゝ、と答へた。併し念の爲だから、何を飼ふのかね、と聞いたたら、文鳥です。と云ふ返事であつた。

夏目漱石
名は金之助。
文學者。文學
博士。大正五
年歿。年五十。
三重吉
姓は鈴木。文
學者。

文鳥は三重吉の小説に出て来る位だから、綺麗な鳥に違なからうと思つて、「ぢや買つて呉れ給へ」と頼んだ。所が三重吉は「是非御飼ひなさい」と同じ様な事を繰返してゐる。うむ、買ふよ、買ふよ。」と矢張頼杖を突いた儘で、むにや／＼云つてゐるうちに、三重吉は黙つて仕舞つた。大方頼杖に愛想をつかしたんだらうと、此の時始めて氣が附いた。

夫から「全體何處で買ふのか。」と聞いて見るに、なに何處の鳥屋にでもあります。」と實に平凡な答をした。何しろいひ出したものに責任を負はせるのは當然の事だから、早速萬事を三重吉に依頼する事にした。

そのうち霜が降出した。自分は毎日伽藍の様な書齋に寒い顔を片附けて見たり、取亂して見たり、頼杖を突いたり、止めたりして暮してゐた。戸は二重に締切つた。火鉢に炭ばかりついである。文鳥は

途に忘れた。

所へ、三重吉が門口から威勢よく這入つて來た。時は宵の口であつた。寒いから火鉢の上へ胸から上を翳して、浮かぬ顔をわざとほてらして居たのが、急に陽氣になつた。

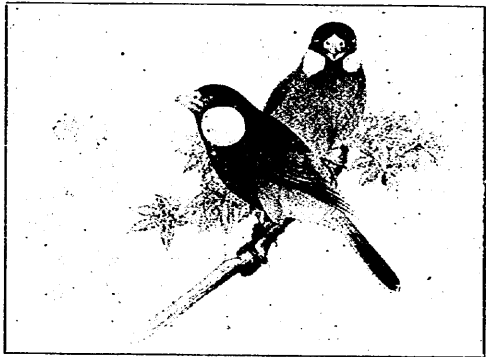
成程綺麗だ。次の間へ籠を据ゑて、四尺許こちらから見るに、少しも動かない。薄暗い中に眞白に見える。籠の中にうづくまつて居なければ、鳥とは思へない程白い。何だか寒さうだ。

翌朝眼が覺めるに、硝子戸に日射してゐる。忽ち文鳥に餌をやらなければならぬと思つた。けれども起きるのが大儀であつた。今に遣らう、今に遣らうと考へてゐるうちに、とう／＼八時過になつた。仕方がないから顔を洗ふ序を以て、冷たい縁を素足で踏みながら、箱の蓋を取つて、鳥籠を明るみへ出した。文鳥は眼をはちつかせてゐる。もつと早く起きたかつたらうと思つたら、氣の毒になつ

た。

文鳥の眼は眞黒である。瞼の周圍に細い淡紅色の絹絲を縫附けた様な筋が入つてゐる。眼をほちつかせる度に、絹絲が急に寄つて一本になる。と思ふと、又圓くなる。籠を箱から出すや否や、文鳥は白い首を一寸傾けながら、此の黒い眼を移して始めて自分の顔を見た。さうしてちゝと鳴いた。

自分は靜かに鳥籠を箱の上に据ゑた。文鳥ははつと留り木を離れた。さうして又留り木に乗つた。留り木は二本ある。黒味がかつた青軸を程よき距離に橋と渡して横に並べた。其の一本を軽く踏まへた足を見る。如



文鳥

何にも華奢に出来てゐる。細長い薄紅の端に眞珠を削つた様な爪が附いて、手頃な留り木を旨く抱へ込んでゐる。するど、ひらりと眼先が動いた。文鳥は既に留り木の上で方向を換へてゐた。しきりに首を左右に傾ける。傾けかけた首を不圖持直して、心持前へ伸ばしたかと思つたら、白い羽根が又ちらりと動いた。文鳥の足は向の留り木の眞中あたりに具合よく落ちた。ちゝと鳴く。さうして遠くから自分の顔を覗き込んだ。

其の頃は日課として小説を書いて居る時分であつた。飯と飯の間は大抵机に向かつて筆を握つて居た。靜かな時は自分で紙の上を走るペンの音を聞く事が出来た。伽藍の様な書齋へは誰も這入つて來ない習慣であつた。筆の音に淋しさ云ふ意味を感じた朝も晝も晩もあつた。併し時々此の筆の音がびたりと止む。又止めねばならぬ折も大分あつた。其の時は指の股に筆を挟んだ儘、掌へ

顎を載せて、硝子越に吹荒れた庭を眺めるのが癖であつた。それが濟むと載せた顎を一應撮んで見る。それでも筆と紙とが一所にならない時は撮んだ顎を二本の指で伸ばして見る。すると縁側で文鳥が忽ちちよ／＼と二聲鳴いた。筆を擱いて、そつと出て見ると、文鳥は自分の方を向いた儘留り木の上からのめりさうに白い胸を突出して高くちよ／＼と云つた。

自分は又籠の傍へしやがんだ。文鳥は膨んだ首を二三度豎横に向け直した。やがて一團の白い體がほいと留り木の上を抜け出した。と思ふと綺麗な足の爪が半分程餌壺の縁から後へ出た。小指を掛けてもすぐ引つ繰返りさうな餌壺は釣鐘のやうに静かである。流石に文鳥は軽いものだ。何だか淡雪の精の様な氣がした。

文鳥はつと嘴を餌壺の真中に落した。さうして二三度左右に振つた。綺麗にならして入れてあつた粟がはら／＼と籠の底に零れ

た。文鳥は嘴を上げた咽喉の所で微かな音がする。又嘴を粟の真中に落す。又微かな音がする。其の音が面白い。靜かに聽いて居ると圓くて細やかで、而も非常に速かである。董程な小さい人が、黄金の槌で瑪瑙の基石でもつゞけ様に敲いて居る様な氣がする。

嘴の色を見ると、紫を薄く交ぜた紅の様である。其の紅が次第に流れて、粟をつゞく口尖の邊は白い。象牙を半透明にした白さである。此の嘴が粟の中へ這入る時は非常に早い。左右に振撒く粟の珠も非常に輕さうだ。文鳥は身を逆さまにしないばかりに、尖つた嘴を黄色い粒の中に刺込んで、膨んだ首を惜氣もなく右左へ振る。籠の底に飛散る粟の数は幾粒だか分らない。それでも餌壺だけは寂然として靜かである。重いものである。餌壺の直徑は一寸五分程だと思ふ。

自分はそつと書齋へ歸つて、淋しくペンを紙の上に走らせてゐ

た。縁側では文鳥がちよこ鳴く。折々はちよこも鳴く。外では水枯が吹いてゐた。

夕方には文鳥が水を飲む所を見た。細い足を壺の縁へ懸けて小さい口に受けた一雫を大事さうに仰向いて吞下してゐる。此の分では一杯の水が十日位續くだらうと思つて、又書齋へ歸つた。晩には箱へ仕舞つて遣つた。寝る時硝子戸から外を覗いたら、月が出て霜が降つて居た。文鳥は箱の中でこもりこもしなかつた。

明くる日も亦氣の毒な事に遅く起きて箱から籠を出してやつたのは、やつぱり八時過であつた。箱の中ではさうから眼が覺めて居たんだらう。それでも文鳥は一向不平らしい顔もしなかつた。籠が明るい所へ出るや否や、いきなり眼をしばたゝいて、心持首をすくめて自分の顔を見た。

其の日は一日淋しいペンの音を聞いて暮した。其の間には折々

ちよこ云ふ聲も聞えた。文鳥も淋しいから鳴くのではなからうかと考へた。併し縁側へ出て見ると、二本の留り木の間を、彼方へ飛んだり、此方へ飛んだり、絶間なく行きつ戻りつしてゐる。少しも不平らしい様子はなかつた。

次の朝は又怠けた。顔を洗つて、食事を済まして、始めて氣が附いた様に縁側へ出て見ると、いつの間にか籠が箱の上に乗つてゐる。文鳥はもう留り木の上を面白さうにあちらこちらと飛移つてゐる。さうして時々は首を伸ばして籠の外を下の方から覗いてゐる。其の様子が中々無邪氣である。

粟はまだある。水もまだある。文鳥は満足してゐる。自分は粟も水も易へずに書齋へ引込んだ。

晝すぎ又縁側へ出た。食後の運動かたぐい、五六間の廻り縁をあるきながら、書見するつもりであつた。所が出て見ると、粟がもう七

分がた盡きてゐる。水も全く濁つて仕舞つた。書物を縁側へ抛り出して置いて、急いで餌と水を易へて遣つた。

次の日も亦遅く起きた。而も顔を洗つて飯を食ふまでは縁側を覗かなかつた。書齋に歸つてから、或は昨日の様に家のものが籠を出して置きはせぬかと、一寸縁へ顔だけ出して見たら、果して出してあつた。其の上、餌も水も新しくなつて居た。自分はやつと安心して首を書齋に入れた。途端に文鳥はちよ／＼と鳴いた。それで引込めた首を又出して見た。けれども文鳥は再び鳴かなかつた。げ／＼な顔をして、硝子越に庭の霜を眺めてゐた。自分はさう／＼机の前に歸つた。

小説は次第に忙しくなる。朝は依然として寢坊をする。一度家のものが文鳥の世話をしてくれてから、何だか自分の責任が軽くなつた様な心持がする。家のものが忘れる時は自分が餌をやる水

やる。籠の出し入れをする。しない時は家のものを呼んでさせる事もある。自分は只文鳥の聲を聞くだけが役目の様になつた。

それでも縁側へ出る時は、必ず籠の前へ立留つて文鳥の様子を見た。大抵は狭い籠を苦にもしないで、二本の留り木を満足さうに往復して居た。天氣の好い時は薄い日を硝子越に浴びて、しきりに鳴立ててゐた。

或日の事書齋で例の如くペンの音を立てて倦しい事を書き連ねてゐると、不圖妙な音が耳に這入つた。縁側でさ／＼とさら／＼と云ふ、雛段をあるく内裏雛の袴の擦れる音でも形容したらよからうと思つた。自分は書きかけた小説を餘所にして、ペンを持つた儘縁側へ出て見た。すると文鳥が行水を使つて居た。

水は丁度易へ立ててあつた。文鳥は軽い足を水入の眞中に胸毛迄浸して時々白い翼を左右にひろげながら、心持水入の中にし

やがむ様に腹を押し附けつゝ、總身の毛を一度に振つて居る。さうして水入の縁にひよいと飛上る。しばらくして又飛込む。水入の直徑は一寸五分位に過ぎない。飛込んだ時は尾も餘り、頭も餘り、背は無論餘る。水につかるのは足と胸だけである。それでも文鳥は欣然として行水を使つてゐる。

自分は急に代籠かごを取つて來た。さうして文鳥を此の方へ移した。それから如露を持つて風呂場へ行つて、水を汲んで籠の上からさあ／＼と掛けてやつた。如露の水が盡きる頃には、白い羽根から水が珠になつて轉がった。文鳥は絶えず眼をほち／＼させてゐた。

日數が立つに従つて、文鳥は善く囀る。併しよく忘れられる。或時は餌壺が粟の殻だけになつてゐた事がある。或時は籠の底が糞で一杯になつてゐた事がある。或晚宴會があつて遅く歸つたら、冬の月が硝子越にさし込んで、廣い縁側がほの明るく見える中に、鳥籠

がしんとして箱の上に乗つて居た。其の隅に文鳥の體が薄白く浮いた儘、留り木の上に有るか無きかに思はれた。自分は外套の羽根を返して、すぐ鳥籠を箱のなかへ入れてやつた。

翌日、文鳥は例の如く元氣よく囀つてゐた。それから時々寒い夜も箱に仕舞つてやるのを忘れることがあつた。或晚いつもの通り書齋で専念にペンの音を聞いて居ると、突然縁側の方でがたりと物の覆つた音がした。併し自分は立たなかつた。依然として急ぐ小説を書いてゐた。わざ／＼立つて行つて、何でもないと忌々しいから、氣にかゝらないではなかつたが、矢張一寸聞耳を立てた儘、知らぬ顔で濟ましてゐた。其の晩寢たのは十二時過であつた。便所に行つた序に、氣掛りだから、念のため一應縁側へ廻つて見ると、籠は箱の上から落ちて居る。さうして横に倒れてゐる。水入も餌壺も引つ繰返つてゐる。粟は一面に縁側に散らばつてゐる。留り木は抜け

出してゐる。文鳥はしのびやかに鳥籠の棧にかじり附いて居た。自分
分は明日から誓つて此の縁側に猫を入れまいと決心した。

翌日文鳥は鳴かなかつた。粟を山盛入れてやつた。水を漲る程入
れてやつた。文鳥は一本足の儘長らく留り木の上を動かかなかつた。

二三日忙しい用があつて、文鳥の事を忘れて居た。或日外から歸
つたのは午後三時頃である。玄關へ外套を懸けて、廊下傳ひに書齋
へ這入る積りで、例の縁側へ出て見ると、鳥籠が箱の上に出してあ
つた。けれども文鳥は籠の底に反つ線返つて居た。二本の足を硬く
揃へて、胴と直線に伸ばしてゐた。自分は籠の傍に立つて、ぢつと文
鳥を見守つた。黒い眼が眠つてゐる。臉の色は薄蒼く變つた。

餌壺には粟の殻ばかり溜つてゐる。啄むべきは一粒もない。水入
は底の光る程涸れてゐる。西へ廻つた日が硝子を洩れて斜に籠に
落ちかゝる。

自分は冬の日に色づいた朱の臺を眺めた。空になつた餌壺を眺
めた。空しく橋を残してゐる。二本の留り木を眺めた。さうして其の
下に横たはる硬い文鳥を眺めた。

自分はこゝんで兩手に鳥籠を抱へた。さうして書齋へ持つて這
入つた。十疊の真中へ鳥籠を卸して、其の前へかしまつて籠の戸
を開いて、大きな手を入れて、文鳥を握つて見た。柔い羽根は冷え切
つてゐる。

拳を籠から引出して、握つた手を開けると、文鳥は靜かに掌の上
にある。自分は手を開けたまゝ、しばらく死んだ鳥を見詰めて居た。
それから、そつと座蒲團の上に卸した。さうして烈しく手を鳴らし
た。

十六になる小女が、はいと云つて敷居際に手をつかへる。自分は
いきなり、蒲團の上にある文鳥を握つて、小女の前へ抛り出した。小

女は俯向いて疊を眺めた儘黙つてゐる。自分は、餌を遣らないから、さうく死んで仕舞つた。と云ひながら、下女の顔を睨めつけた。下女はそれでも黙つてゐる。

自分は机の方へ向き直つた。さうして三重吉へ端書を書いた。家のものが餌を遣らないものだから、文鳥はさうく死んで仕舞つた。頼みもせぬものを籠へ入れて、しかも餌を遣る義務さへ盡くさないのは残酷の至だ。と云ふ文句であつた。

自分は、之を投函して來い、さうして其の鳥をそつちへ持つて行け。と下女に云つた。下女は、こへ持つて参りますか。と聞返した。こへでも勝手に持つて行け。と怒鳴りつけたら、驚いて臺所の方へ持つて行つた。

暫くすると、裏庭で子供が、文鳥を埋めるんだ、埋めるんだ。と騒いでゐる。庭掃除に頼んだ植木屋が、御嬢さん、此處いらが好いでせう。

と云つてゐる。自分は進まぬながら、書齋でペンを動かしてゐた。

翌日は何だか頭が重いので、十時頃になつて漸く起きた。顔を洗ひながら裏庭を見ると、昨日植木屋の聲のしたあたりに、小さい公札が蒼い木賊の一株と並んで立つてゐる。高さは木賊よりもずつと低い。庭下駄を穿いて、日蔭の霜を踏碎いて、近づいて見ると、公札の表には、此の土手登るべからず。とあつた。子供の手蹟である。

午後三重吉から返事が來た。文鳥は可哀さうな事を致しました。とあるばかりで、家の者が悪いとも、残酷だとも、一向書いてなかつた。(文鳥)

日野山
京都府宇治
郡。
鴨長明
山城國加茂社
の氏人。和歌。